平成二十一年度第十九回全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

「グループホーム」を読んで

草薙　陸

ぼくもマサくんのように、だれかを思って、がんばったことがあるだろうかと考えました。すると、小さなことだけど、「ありがとう。」と言われたことを思い出しました。それは、母さんがいそがしそうに料理を作っていた時です。料理を運んだり、つくえをふいたりして、母さんの手伝いをしました。母さんが、

「ありがとう。すごく助かった。」

と、言ってくれたのでぼくはちょっとのことなのに助かったんだなと思ってうれしかったです。

もう一つは、一人で遊んでいる人を見かけた時です。

「いっしょに遊ぼうよ。」

とさそってあげました。すると、

「さそってくれてありがとう。」

と喜んでくれました。

また、ぼくが「ありがとう。」といったこともあります。それは、プールで友達と遊ぶ約束をしたのに、友達が来なかった時です。一人で遊んでいたら、同じクラスの友達が、

「いっしょに遊ぼう。」

と言ってくれました。プールが終わった後も、

「またいっしょに何かして遊ぼう！。」

と言ってくれたので、すごくうれしかったです。

もう一つは、ぼくが友達にもらったお気に入りの消しゴムが無くなった時です。友達がいっしょにさがしてくれました。さがすのに約一時間がかかったけれど、友達はいっしょうけんめいに探してくれました。友達が、

「あっあんな見つけにくい所にあったよ。」

と本だなの下の暗い所から見つけ出してくれました。ぼくが、友達に、

「いっしょにさがしてくれて、消しゴムを見つけてくれてありがとう」

と言うと友達はにっと笑って、

「どういたしまして。」

と言いました。

考えてみると、「ありがとう。」と言ったり、言われることは結構あります。すごく特別なことではなくても、「ありがとう。」の言葉を使えるのはとても良いことです。ぼくは、毎日を「ありがとう。」とよく言って、よく聞けるように過ごしたいなと思います。

対象図書名　グループホーム

大賞へ審査員のひとこと

「見つけてくれてありがとう。」と一言。ありがとう、と言われると照れてしまうことが多いですが、ニッと笑って「どういたしまして。」という会話。独創的だし、ありがとうと言った側と言われた側、双方ともそれを大切にする気持ちが素敵です。経験から拾い上げたことを見事な読書作文に仕上げましたね。

受賞者のひとこと

ぼくは、作文を書くことがとても苦手で今までほめられたことなどありませんでした。だから、今回の読書感想文も何を書いたらいいのかわからなくて、なかなか書けませんでした。なやんだ結果、ぼくの思ったことをすなおに書くことにしました。

ぼくの感想文を読んだお姉ちゃんは、「くすっ。」と笑って、「陸らしいね。」と言っていました。かっこうつけずにぼくらしく書いたことが良かったのかなと思います。

苦手な作文でこんなに大きな賞をもらえたことは、今でも信じられませんが、この賞をきっかけに、もっとたくさん本を読んでいきたいと思います。

小学生の部・最優秀賞（小四）

心と心の会話

志田　龍耶

ぼくは、母の仕事の話をよく耳にします。その時の母は笑顔です。母は、知的障害者の先生です。母は、天才です。なんでもできるし、いつも一番になります。好きなパン作りまで、先生になりました。他にも人にたのむことがないほど、何でもやってしまいます。母がにこっと笑ってくれると心がいやされ落ちつくことができます。母は人の心の中の気持ちがわかります。やさしい母だからわかるのだと思います。ぼくの自まんの母です。純平のお母さん、良子もぼくの母と同じような仕事をしています。

マサ君も知的障害を持っています。だけどふつうの人と心は、同じです。学校で、七組は知的障害者ですが、ぼくが一年生の時、障害者が最初にぼくと友だちになってくれました。男の子は、ぼくを自分の教室にさそってくれました。男の子にはやさしさがありました。マサ君もきっと、友達がもっとほしいから良子さんにあまえていたのだと思います。

もしぼくが知的障害者だったら、まず、仲良しになる友達をつくります。たとえ障害者だったとしても、ふつうの人と心は同じはずだから一

人ぼっちでいるとさびしいと思います。ぼくの母が仕事の休みの日は、障害者の中には、泣いてしまう人が何人もいるのだそうです。頼りに出来る人がいなく心ぼそくなって泣いてしまうのだと思います。

グループホームに入っている人は、家族といっしょではなくてさびしくないのでしょうか。ぼくがもし、グループホームに入っていたら、さびしさにたえられません。一人ぼっちは、考えられません。姉も、母も父もいないグループホームには、その代わりになる人がいるのでしょうか。全部自分たちだけでやらなければならないのでしょうか、安心してくらせるのでしょうか。相談できる人がいるのでしょうか。あまえてしまいたい時、頼りになる人はいるのでしょうか。さびしくなったら助けてくれるのでしょうか。このような、なやみ事はかいけつできるのでしょうか。

ぼくの母は、前はパンの先生をしていました。その仕事をへらして、今の仕事になった時、ぼくとしては、パンの先生のほうがかっこよかったのにどうして今の仕事についてしまったのだろうとその時は思いました。でも今は、『グループホーム』を読んで母の仕事のすばらしさがわかるような気がします。

ぼくの母はやさしくて、おもしろい人です。仕事場でも明るく元気で、少しおっちょこちょいです。みんなを楽しませるためにがんばっています。そのようにみんなをささえて、もしこまっている人がいたら相談にのってあげてかいけつし、元気づけて、楽しい場にさせています。母はすごいと思います。

ぼくは今、七組の生徒と仲良くしています。もっと障害者と仲良くしたいと思っています。障害者であっても、心と心の会話でおたがいの気持ちが通じる事ができたらいいと思います。

対象図書名　グループホーム

受賞者のひとこと

ぼくが、この本「グループホーム」を読んだ理由は、母が仕事で知的障害者の先生をしているからです。

受賞を知ったのは、「大事な話があるから早めに来て」というじゅくからの電話でした。最優秀賞と聞いたぼくは、うれしさがあふれ、あまりのうれしさにボーっとしてしまいました。ゆめにも思ってなかったし考えたこともなかったのですから。

全国読書作文コンクールに、参加して、こんなにすばらしい賞を受賞してぼくは、一生の宝物になったし、なによりも自信がつきました。これからも、いい本に出会えていい作文を書いていきたいです。

小学生の部・最優秀賞（小五）

新しい夢

長谷　梨穂

私は、読書が苦手で、きらいでした。でも、このコンクールを通して、読書が好きになりました。

私が選んだ本は、「グループホーム」です。なぜ、私がこの本を選んだかというと、自分が今、本当に人を差別していないかを確かめたかったからです。

なぜ確かめたかったかと言うと、自分には人を差別していないと自信があったけど、本当かな？と不安になったからです。

読む前の私は、障害を持っている人を見ると「かわいそうやな。障害を持ってたらいやなんかな？」と思っていました。

でも、この本を読んで、障害を持っている人は、障害を持っていてもいやじゃない、かわいそうと思わないでほしいと思っていると分かりました。

この本を読む前は、純平がグループホームでくらしていくうちに、自分の差別意識に気づいて楽しくせっして差別意識をなくそうという物語だと予想していました。

でも、本当の内容は、純平が知的障害者の人と楽しくせっするだけじゃなく、大きな問題をのりこえていきながら、差別意識をなくす物語でした。

その大きな問題とは、純平の親への甘えです。

私は、本当は仲よくしたくても、自分と気のあわない人とは、なかなか仲よくできません。それに、自分では悪いと思っていても、人を傷つける言葉を、すらっといってしまうこともよくあります。

どうして、そういうことをしてしまうのか、この本を読んで少し分かった気がします。

それは、今までの自分には「甘え」があったからです。この本の中でも、純平がマサ君にひどいことを言ったのは、マサ君が勝手にお父さんが、買ってきてくれたプリンを食べた事と、お母さんにシャンプーをしてもらっていたことが原因です。純平はこの「甘え」に気づいたから、マサ君を許せたのだと思います。

私も、自分の心の中の甘さに気づいて、その「甘さ」に勝ちたいと思います。

この「グループホーム」というたった一冊の本がこんなにも私を変えてくれました。

これからもたくさんの本を読んで、新しい自分を見つけていきたいです。

対象図書名　グループホーム

受賞者のひとこと

「梨穂、最優秀賞やで！」

塾から帰ってきた姉がいきなり言った。私は最初、何の事なのかわからなかった。姉の話を聞いてやっと読書作文コンクールの事だと分かった。

信じられなかった。姉に何度も聞きかえして、本当だと分かった時は、心の底からびっくりした。

夏期講習で読書感想文を書くと聞いた時はいやだなぁと思った。本を読むのは好きだけど、作文を書くのは苦手だし、コンクール用の本は、おもしろくないと、思っていたからだ。でも、先生が紹介してくれた本は、どれもとてもおもしろそうだった。

終わりまで一気に読んでしまい、感想文もあまりこまらずに書く事ができた。

これからもいろいろな本をたくさん読んで、知らない世界に旅してみたい。

小学生の部・最優秀賞（小六）

「支え合う気持ち」

柳田　佑真

実際にグループホームを訪ねたことのある人はおそらく少ないと思う。低学年の時だったが、今でもはっきり覚えている。先生がグループホームを訪ねてみようと提案したのがきっかけだった。好奇心の強いぼくは、単純におもしろそうだなと思っていた。行ってみると、施設は広々と明るい雰囲気だった。ところが、障害者の人たちは、フラワーハウスの人たちとちがって決して明るくはなかった。楽しく交流できたらいいなあと思っていたのに、それどころかぼくたちは全く受け入れてもらえなかった。話しかけても、無表情で言葉は何ひとつ返ってこなかった。ぼくはその時、無視された事がとてもショックで、行かなければよかったと後悔した。

今思うと、ぼくは何も理解していなかった。幼かったというのもあるが、障害者の現実を全く分かっていなかったのだ。いろんな人がいるということを。フラワーハウスの人達のように元気で明るい人もいれば、心を閉ざしている人もいる。見かけだけでは何も分からないのだ。それなのに、ぼくは受け入れてもらえなかったことに対して、自分勝手に腹

を立てて、障害者の人たちを一方的に非難していたのだ。なぜ、もっと心を開かないのか。自分たちの殻にばかり閉じこもっているのは絶対よくない。そう考えることしかできなかった。でもそれはあまりに無知というものだった。彼らも、そうしたくてしていたわけではないのだろう。普通に話せないから、何らかのケアが必要だったのだと思う。ぼくは今、相手の気持ちが読める道具があったらどんなにいいだろうと思ったりする。

最初は、純平もフラワーハウスの人たちに偏見をもっていた。それは純平もその人達のことを本当に理解していなかったからだと思う。でも、純平は変わった。純平の心の中で何かが吹っ切れた感じだ。ぼくもいろいろなことを考えさせられた。

以前、学校に障害をもった男性が来て、ぼくたち生徒の前で話をしたことがあった。障害をもっている人たちの現状についてだった。その中で、悲しい言葉があった。「私たち障害者は、仕事をしたくてもなかなか仕事に就けません。」その言葉を聞いて、ぼくたちの思っている以上に現実は厳しいと知った。「障害者」というだけで差別や偏見の目で見ること自体、心が貧しいような気がする。

ぼくは、みんなが支え合える世の中になればどんなにいいだろうと思う。

対象図書名　グループホーム

受賞者のひとこと

この春入塾したばかりの僕が「最優秀賞」受賞だなんて、本当に信じられなかった。新入りの僕が、いきなりこんな大きな賞をいただくなんて、何だか夢のようだ。

僕が入った「作文・朗読教室」は、作文指導だけでなく、古典朗読などにも力を入れている珍しい教室だ。見学した時も、みんなの表現力のすばらしさに圧倒され、自分はついていけるか心配していた程だった。

コンクール作文の書き方もよく分からず、最初はあら筋ばかり書いていた。そんな僕に先生は「自分しか出せない体験を考えてみるといいね。」とか、「好きなだけ書いていいよ。」と、言ってくれた。僕は思う存分書いた。先生がいい所をほめてくれるので、書くのがだんだんおもしろくなっていった。僕は今まで、こんなにじっくり考え、こんなに時間をかけて作文を書いたことがなかった。心を込めて清書し終えた時、今まで味わったことのない達成感でいっぱいになった。

この受賞を聞いた時の母の驚き様といったら、それはもう大変なものだった。そして、誰よりも驚いたのは僕自身だった。この受賞を機に、もっともっと努力していこうと思う。

中学生の部・大賞

「きっと天使だよ」を読んで

小椋　美紅

私の祖父は、今の私と同じ年齢の十五歳の時から兵隊の訓練を受け、第二次世界大戦のときはフィリピン方面で戦っていました。しかも、自ら志願して兵隊になったことを母から聞いた時には、とても驚きました。私にはそんな勇気が必要で、自分が死んでしまうかもしれないような恐怖に向き合うことは到底できないし、考えられないと思います。そして、祖父は、戦っている時に右の腕に鉄砲の弾が当たり、今でもその傷あとが残っています。その当時、熱帯地方で衛生状態が悪かったため、傷口にうじ虫がわいたそうです。もし、あと数センチ当たり所がずれていたら、祖父の命は無くなってしまっていたでしょう。だとするなら、今の私はこの世に存在しません。このことからも、一つ一つの命はとても大切なものだと痛感しています。

この本に出てくるマリオとキトは、家も家族もなにもかもすべてを戦争に奪われてしまいます。そんな人々は、六十四年前の日本にはたくさんいたでしょうし、今でも、戦争の続いている国々ではマリオやキトのような孤独な子供達がきっとあふれているのではないでしょうか。私はそんな、何もかも失ってしまうような孤独や恐怖を感じたことはありません。日々、衣食住に何ひとつ不自由を感じることなく生活でき、いつもまわりには家族や友人達がいてくれます。それが、私にはあたり前の日常になっているため、その本当のありがたさを忘れがちになっているような気がします。このような本に巡り会うたびに、私自身の恵まれた境遇を再認識させられ、今の幸せを感謝せずにはいられません。

私は、今年の春、沖縄へ修学旅行に行きました。飛行機に乗り、上空から見た島々や海は本当に美しく、この場所で六十四年前、本当に戦争があったことが信じられませんでした。本当に何も見えない真っ黒なガマやたくさんの戦死者の名前が刻まれた平和の礎、ひめゆりの塔などを見学し、当時の戦争の悲惨な状況の説明を受けたときは、改めて戦争はなくしていかなければならないものだとつくづく感じました。しかし、同時に大きな矛盾を感じたことも事実です。唯一地上戦が行われた沖縄の人たちだけではなく、日本中の人達が「二度と過ちは繰り返さない」と誓ったはずなのに、沖縄には広大な米軍基地が数多くあるし、戦闘機や爆撃機が地響きするような轟音を立てて、我が物顔で飛び交っていたのです。これらの飛行機は紛れもなく、戦争のために作られたものです。しかも、目の前で飛んでいるということは、訓練、つまり戦争の練習をしているということです。戦争は過去のものだけではなく、これからも起こり得ることを示唆しているようで、何となく重苦しい気分につつまれてしまいました。

マリオは自らの悲惨な戦争体験をもう誰にもさせてはならないという人一倍強い気持ちを持っていました。嫌なことは誰でも忘れたいのに、彼は忘れるどころか、逆境を真正面から受け止め、それをバネにして乗り越えていったのです。そして、いくらお金持ちになろうとも、贅沢な暮らしはしないで、財力をたった一人で残された子供達のために費やそうと考えたのです。キトはそういうマリオに救われた少年でした。キトのように、住む家も家族も、戦争にすべてを奪われた少年は、アフリカだけでなく、イラクにもアフガニスタンにも大勢いるに違いありません。この子供達に温かい手が差しのべられ、マリオのように夢を抱いた強い人になっていくことを祈らずにはいられません。

今日は、八月六日です。広島では記念式典が開かれ、終日平和の祈りが捧げられていることがテレビで報道されていました。会ったこともないのに、戦火の中を一人さまよっているマリオの顔や、サバンナで犬と一緒に死にかけているキトの顔などが、頭の中を過ぎっていきました。

対象図書名　きっと天使だよ

大賞へ審査員のひとこと

自分の祖父の戦争体験。戦争を自分に引き付ける貴重な事実です。祖父が戦場で手傷を負い、もし命を失えば今の自分はこの世に存在しない。この本からスタートした思索の波はそんな思いにたどり着いたのですね。おじいさんが孫の貴方に語り継ぐ光景が目に浮かぶようです。貴重な経験を整然と書き綴った紙面に理知的で優しい人柄が窺えます。

受賞者のひとこと

塾の先生から受賞の知らせを聞いたときは、とても信じられませんでした。まさか私が、このような立派な賞をいただけるとは、全く夢にも思っていませんでしたので、たいへん驚いています。審査に当たってくださった先生方、本当にありがとうございました。

これからも戦争の悲惨さや、平和の大切さについての理解を深め、平和のために私にできることがあれば、何か少しずつでも始めたいと思います。勉強の合間を見て、読書も続けます。これからもよい本とめぐり合いながら、本の中の世界からいろいろなことを学びたいと思います。

中学生の部・最優秀賞（中一）

8分音符のプレリュードを読んで

森岡　采弥

私達子供は、いつも大人に『正直に』や、『ありのままの自分で』などと言われる。それは、生きていくうえでとても大切な事だ。が、はたして本当に私自身はできているのだろうか。そんな疑問が、この本を読み終わってまず浮かんだ。

主人公の秋山果南は、先生からも信頼されるクラスの『いい子』だった。しかし、音大附属中からの転校生、波多野透子のドラマチックな人生や、その音楽の才能に嫉妬をする。そんな自分に気がついてから、それまでの果南ではなくなってしまう。そのため、クラスで孤立したり、陰口をたたかれるようになった。誰からも理解されない孤独と戦いながらも果南は成長し、いつのまにか『いい子』から脱却していた。そして、人からどう思われるかなんて考えずに、自分の気持ちを大切にするようになったのだ。そんな果南を見て、透子もずっとおさえてきた自分の音楽への気持ちを開放する。

私は、この作品の大きなテーマは、本の中だけの話しではなくいつも自分達が無意識に思っている身近な感情ではないかと思う。

まず最初に、果南は転校生の世話を先生から頼まれた。そして先生からそんな重大な役割をもらったことに少し得意になっている。やはりそれほどの事を頼まれるには、先生からの大きな信頼がよせられていないと、できない事だからだろう。その、大きな信頼というものを得るまでに、果南はきっと先生から評価される行動をたくさんしたのだ。その行動すべてが、果南の本当の気持ちや善意だったのだろうか。全部が全部嘘とは限らない。しかし、全てが本当ではなかったと私は思う。純粋ではないかもしれないが、やっぱり『人に気に入られたい』と思い行動をするのが人の心というものだ。私もそんな経験がある。小学生の時、ある日先生のラジカセが重そうだったので、職員室まで持っていくのを手伝ったことがある。めんどうだったのに、なぜ手伝ったのかを考えてみた。すると、さっきの行動は、自分の点を上げるための自己アピールをしたのかもしれないと気付いた。そして、何だか自分に悲しくなった。こんな事でしか自分を先生にアピールできないなんて、みじめな気持ちになった。その事から、私は少し自分の気持ちについて考え直し始めた。

透子に、果南が練習している吹奏楽部を罵られ、ついカッときた果南。これまで抑えていた怒りが爆発し、ついに透子をぶってしまった。私ならぶつなんて事はしないが、果南の怒りはそれほどのものだったのだろう。果南が透子をぶったのは、それだけの事だけではないと私は感じる。吹奏楽部をけなされたのは単にきっかけにすぎず、本当の理由は、透子への嫉妬の方が強いだろう。嫉妬は、誰でも持っていて、時には人をま

ちがった方向へと導いてしまうと思う。私も、嫉妬によって人を傷つけてしまった事がある。学校の授業中の事だ。私はその日調子が悪く、問題がすらすら解けなかった。そんな時となりの友人が、私の解けなかった問題をいとも簡単に解いている。なんだか、私は腹が立った。そして、「〇〇ちゃんは早く解けていいよね。」と嫌味っぽく言ってしまった。後から思えば、どうしてあんなくだらない事を言ったのだろう、と反省した。きっと友達も嫌な思いをしたと思う。友人と私は違うのに、そんな事を比べる事自体おかしいのだ。こんなに簡単な事さえも忘れさせる嫉妬は、やはりこわいと思った。

この物語の果南の変化を見て、私は二つの事を教えられた。

一つはまわりの目や、評価にとらわれない事だ。自分の気持ちに素直になって、本当に心の底から思った事は、体が自然に動くはずである。

もう一つは、人との差を考えすぎないことだ。人と自分を比べるから差を感じ、そこから嫉妬も生まれるのだ。それで、自分まで見失ってしまう思う。自分は自分。ありのままの自分を受け入れていけばいいのだ。

この二つの事を常に自分の中で見つめていれば、本当の自分を知る事ができると思う。そうやって、素直でいる事こそが、大切だと果南は伝えているのではないだろうか。私達も果南や透子が心を自由にしたように、自分の気持ちを少し自由にすることで、毎日がより楽しく、暮らしやすくなるのではないだろうか。

受賞者のひとこと

今回は、こんなに大きな賞をとれて、うれしさとおどろきが混じっています。正直、最初は信じられませんでした。

この読書感想文は、私が今まで書いてきた感想文の中では、とても書きやすい作品でした。本の主人公との共通点がいくつかあり、歳も同年代なので、すごく共感する部分もありました。自分の経験もとり入れやすかったです。やはり、自分に合う本で書けた事が、私にとっても大きかったと思います。

この賞をもらえたことは、私にとって大きなはげみになると思います。これからも文章を書くときには、だれかに見てもらった時のよろこびを思い出して書いていきたいです。

中学生の部・最優秀賞（中二）

「一人一人が心の種をまけば」

松木　俊樹

戦争ほどむごいものはない。主人公のマリオは、ほんの一瞬で全てを失い、ひとりぼっちになってしまった。

今、この瞬間にもどこかで戦争が起きている。人間同士が傷つけ合っている。何の罪もない、キトのような幼い子ども達が犠牲になっている。そう考えると、じっとしていられなくなる。

生まれた時から、僕たちは平和な国しか知らない。自分たちに希望の「明日」があるということに何の疑いも持っていない。その一方で、生まれた時から戦争が続いている国もある。僕はテレビで見たことがある。アフガニスタンの母親たちは、赤ん坊を抱きながら口々にこう言っていた。「この子たちは、生まれた瞬間から銃を持って生まれてきたも同然なんです。」母親の目には「絶望」しかなかった。僕は絶句した。こんなことがあっていいのだろうか。祝福されるべき我が子の誕生をこんなにも悲しげに見つめる母親がいていいのだろうか。戦場に送り出すために生まれてくるなんて……。これほど残酷なことはないだろう。

日本は今年で六十四回目の終戦の日を迎えた。かつて、日本も戦争による多くの犠牲者を生んだ。毎年八月になると、僕たちは戦争という過去をふり返る。それは、「もう二度と戦争をしてはいけない」という思いを忘れないためだと思う。「平和」を心に刻みつけるためにも、過去の歴史を絶対に忘れてはいけないのだ。戦争の悲惨さをずっと語り継いでいかなければならないのだ。

僕はこういう本を読むたびに、いつも思う。平和な国に生きている僕たちがするべきこと、それは「今を大切に、精一杯生きる」ことだと思う。単純だが、とても難しいことだ。

僕は小学校の時、野球のリトルリーグに入っていた。そこに耳の不自由な少年がいた。その障害のせいで、彼は何かとみんなにからかわれていた。話してもどうせ聞こえないと思って、みんなはひどい事を言ったりしていた。僕は、心の中では「差別はよくない」と思いながら、止めもせず黙って見ていた。今思えば、彼はいつも一生懸命だった。何に対しても精一杯やっていた。毎回の練習も休まず、人の見ていない所でも人一倍体を使って練習に打ち込んでいた。レギュラーには絶対なれないと分かっていても、決して気を抜いたりすることがなかった。障害を理由に、決して投げやりになったりしなかった。彼は、まさに今を精一杯生きていたのだ。

平和で、何不自由のない恵まれた暮らしの中にどっぷりつかって、多くの人間は「生きること」自体に鈍感になっている。それは、ある意味でとても「不幸」なことのようにも思えてくる。

マリオは、人もうらやむような成功も富も手に入れた。でも、どんなに望んでも家族と共に過ごした幸せな日々はもう二度と戻ってはこない。家族を失うということは希望を失うことに等しいと思う。

僕の家は大家族だ。末っ子の僕は、両親や祖母の愛情だけでなく、年の離れた兄姉からもかわいがってもらい、今日までそれが当たり前だと思って暮らしてきた。どんなにつらいことがあっても、家族の支えがあったから乗り越えられた。家族に守られていたからこそ、のびのびと、いろいろな事に挑戦できた。家族は誰にとってもかけがえのない存在だ。まして、幼い子どもにとっては家族は最も心のより所となるものだ。どんな時も無条件で「愛情」に包まれる所だと、僕は思う。そんな家族がいない人生など、想像もできない。そんな孤独には絶対、耐えられないだろう。マリオのように家族を失い天涯孤独になったら、自分の「存在」そのものが何かむなしく思えてきそうだ。

でもマリオは、自分と同じ悲しみを背負った子ども達に救いの手をさしのべ続けた。「この世に生まれたものはみんな、共に生きるために造られたのだ。」という強い思いがあったから。

「奇跡を信じるかね？」そう聞いた連隊長は明らかに他の兵士たちとは違っていた。まさに運命を決める人物だ。彼の澄んだ瞳に、深い悲しみが宿っていたのはなぜだろう。もしかしたら彼自身も、言い尽くせないほどの悲しみを経験していたのではないだろうか。彼は奇跡をもたらす「天使」だったのかもしれない。

僕たちは、一人一人が何かをしなければならない！カテリーナが言うように人生には種まきが必要だ。一人一人が優しい心の種をまいて、思いやりの実が結ぶよう、努力しなければならない。天使がやってくるのを待っているのではなく、僕たち一人一人が「天使」の心を持つことが大切だと思う。

対象図書名　きっと天使だよ

受賞者のひとこと

「いつか、とれたらいいなあ」と思っていた大賞を昨年受賞することが出来、僕は、今まで以上に本を読み、表現することにも一層意欲的になった。明らかに僕は成長したと思う。

そして今年、「最優秀賞」――まさか連続で大きな賞を受賞できるとは考えてもいなかったので、聞いた時は本当に嬉しかった。

今回僕は、「戦争」がテーマの、とても深刻な内容の本を選んだ。今回の作文は、先生のアドバイス無しでは到底書き上がらなかった。戦争の悲惨さを痛感するものの、何をどう掘り下げて書くべきか、なかなか考えがまとまらなかった。苦しんでいる僕に、先生がいろいろな視点から物語を読み解き、方向性を示唆してくださった。頭をひねりながら、僕は何度も書き直した。締切間際まで書いていた。いつの間にか下書きの原稿用紙が二十枚を越えていた。

そうして書き上げた作文だけに、この受賞の喜びは大きい。先生がいつも言っている「賞をとることが到達点ではない」という言葉を心に刻み、この大きな賞におごることなく、これからも自分自身を磨いていくつもりだ。

偶然にも表彰式にあたる十月十一日は、両親の結婚記念日。式典会場での、両親の笑顔が目に浮かんだ。

中学生の部・最優秀賞（中三）

「8分音符のプレリュード」を読んで

金本　睦未

この本を読み進めていくうちに、

「あのときみたいだ…」

そんなことが頭に浮かんだ。小学四年生のとき、透子や果南のように孤立した時期があった。二人のように嫌味を言われたりするようなことはなかったが、誰からも相手にされなかった。誰も信じられなくなり、そのときの担任の先生ともあまり口を聞かなくなった。当然、友達は話すどころか目も合わせようとしなかった。そんなことが何週間か続いたある日、一人の友達がわたしに話しかけてきて、

「ごめん、ほんとにごめんね。」

と言った。多分、本当は嬉しかった。でも、わたしの心の中で黒いものが揺れた。

「今さら何？」

そんなことを思ってしまった。そのときは笑顔で対応したものの、見えない何かを抱えたまま、わたしはだんだんと輪の中に戻っていった。

わたしは、自分の中に何人かの自分がいることを果南の存在によって

気付かされた。みんなの前で見せる「わたし」と、誰も知らない自分の中だけの「ワタシ」。他にも区別すればたくさん出てくるだろうが、大きく分ければこの二人だろう。普段、何気なく過ごしていて、嫌でも「ワタシ」に気付かされる瞬間は多々ある。例えば、今までのいろいろな経緯で、わたしはあまり人を信じることがなくなった。どれだけ仲のいい子でも、ふとした行動・言動に失望や苛立ちを感じてしまい、なんとなく冷めてしまうこともある。また、どれだけ振り払っても「自分はひとりぼっちなんだ」というなんとも言えない思いが押し寄せてくることもある。そんな「ワタシ」に押しつぶされそうになったとき、わたしの支えになったのは音楽だった。何度音楽に救われたかわからない。いつもわたしの傍には音楽があって、わたしが唯一、何よりも信頼しているものだった。

　そういった経験から、わたしは将来、傷ついた人や、どうしても立ち直れない何かを抱えてしまった人に音楽を届けたい、音楽で人を救いたいと思うようになった。辛いとき、苦しいときに心の支えになるものは人それぞれで、それはわたしのように音楽かもしれないし、本、友達、あるいは尊敬している人などの言葉かもしれない。そういった大切な、何にも代えがたいものを得ることで人は進むことができるのだと思う。何かで悩んで、辛くなって、どうしようもなくなっているたくさんの人たちも、それを見つけることでまた一歩踏み出すことができるのではないだろうか。「わたし」と「ワタシ」をどちらも認めながら生きていかなければいけないと思う。どちらも大切な自分だから。

　人の心は海だと思う。浅いところでは、透き通った水や白い砂、きれいな貝殻など、美しいものばかり見えるだろう。しかし、深いほうへ進めば進むほど、辺りは見えなくなり、恐ろしい生きものが行き交う。十五年間しか生きていないわたしたちに暗い海の果てを想像することができるだろうか。今まで感じたことのない闇に耐えることはできるのだろうか。他人を理解するということは、その人の抱えている闇も理解しなければならないということで、その覚悟のない人に「人を知る権利」は与えられないと思う。相手との信頼を築きたいなら美しいところばかりを見てはいけないのだ。

　透子と果南はお互いに抱えている闇を理解しあうことができた。だからこそ本物の友情を手に入れることができたのだと思う。

「あなたにも本当の友達がいますか」

と聞かれて、胸を張って「はい」と答えられる自信は正直ない。でもいつか、そんな存在に出会えたなら、わたしの中で何かが大きく変わるかもしれないし、無意識のうちに自分でどんどん高くしてしまった壁を崩すことのできる日がくるのかもしれない。

　生きている人の数だけ人生があって、それは必ずしも幸せなことばかりで終わることはできない。傷つかない人生なんてありえないし、悩みのない人生なんて意味がない。そこに意味を持たせるにはたくさんの壁を乗り越えなくてはならない。それをどうやって乗り越えるか、誰と、

何と共に乗り越えるかによってその人の人生は左右されるかもしれない。いつまでも殻に閉じこもって、待ってばかりいてはいけない。何かをきっかけに進まなければ楽しさは見つけることができないのだ。わたしも、透子にとっての音楽、果南にとっての先生のような、目標ややりたいことを探しに行こうと思う。どんな困難があっても、たとえ道に迷ったとしても、胸を張って歩けるような強い人になりたい。

対象図書名　8分音符のプレリュード

受賞者のひとこと

私はこの賞をいただいたとわかったとき、とても驚きました。普段から文章を書くことは好きなのですが、このような形で賞をいただくことが出来てとても嬉しく思います。

この作文を書くとき、自分の中でいろいろと思うことがあり、それをどう書くか、表現するかということを少し悩みましたが、自分の感じたことを素直に書こうと思い、この文章を書き上げました。文を書くということを通して、自分の思ったことや感じたことを文章にするということの難しさ、それを読んだ方がどうとるのか、などの不安も感じましたが、やはり書いていく課程での楽しさが一番大きかったと思います。

文章を書くということを仕事にしている方々に、私の作文を読み、評価していただいたと思うと、なんだかとてもわくわくします。また、中学に入る前まで文章を書くことが嫌いだった私が、今ではこのような賞をいただいているということを考えると、少し不思議な感じもしています。この経験を励みにこれからも書く力をのばせるよう、努力していこうと思います。